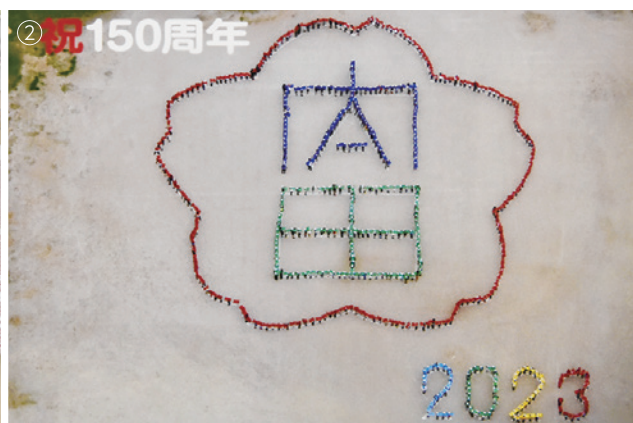


# 太田小学校150周年記念事業を実施



1873-2023



① 150周年記念セレモニーでの記念モニュメント「いちょうくん」と「ハッピー」の除幕式（1月）  
 ②運動場に全校児童で描いた校章（5月） ③文字職人の杉浦誠司さんによる講演（6月）  
 ④全校児童で取り組んだモザイクタイルアート制作 ⑤記念品の「航空写真入りクリアファイル」と「校章入りタオルハンカチ」

7月に発行した広報紙でもご紹介しましたが、太田小学校は明治六年（1873年）4月に「全国通番、第二大学区三十三番中学校区第五十三番小学校」として祐泉寺（太田本町）を仮校舎とし、「明道義校」として開校したのが始まりとされ、今年度、開校150周年を迎えました。

これを記念し、5月には、150周年の記念事業として、全校児童で運動場に「校章」を人文字で描き、セスナ機からの航空写真を撮影しました。

その後、6月には5・6年生児童を対象に記念講演会「夢・ありがとう」を文字職人の杉浦誠司さんを講師に開催。「夢」をテーマとした講話に、子どもたちそれぞれが描いている「夢」に対する考え方を、もう一度見つめ直す機会になりました。

## comment 開校150年の節目に 郷里の偉人を誇る



学校長 梅村 高志 Umemura Takashi

■ 明治六年「明道義校」として開校した本校は今年度、創立150周年という記念すべき節目を迎えました。その歴史の重みは、美濃加茂市が生んだ偉人たちの業績と共に、地域に深く刻まれています。

■ 近代文学の匠、坪内逍遙 日本近代文学の先駆者である坪内逍遙博士は1859年（安政六年）、美濃国加茂郡太田村で生まれました。父、坪内平右衛門は太田代官所（現在の太田小運動場）の手代でした。

逍遙は十番目の末子として、両親や兄弟からの愛情を受け、幼少期の約十年間を太田の地で過ごしました。のちに、愛知英語学校で学び、東京開成学校（東京大学）へ入学。卒業後は東京専門学校（早稲田大学の講師となり、明治十八年、『当世書生気質』『小説神髓』を発表し、近代文学の礎を築きました。

英国シエイクスピア作品の全訳など、多くの偉業を残し、1935年（昭和十年）、熱海で永眠しました。

150周年の記念品として、「航空写真入りクリアファイル」と「校章入りタオルハンカチ」を、渡邊峻哉PTA会長から代表児童に手渡しました。

また、PTAの主體的な取り組みとして、同じく1月に全校児童でモザイクタイルアートの制作を行いました。これは、子どもたちが150周年の「今」という時間に、この学校で学んでいたという足跡を未来へ残していこうと企画したものです。

制作では、太田小学校の校章とともに「150」の文字や「いちょうくん」がデザインされた図面をもとに、クラスごとに壁画の図面と担当するイラスト部分の部品が割り振り制作作業を実施。子どもたちは担当する部分の図面を確認しながら、1センチ四方の小さなタイルを並べていきました。その後、各クラスで制作した部品が、一か所に集められ、一つの作品が出来上がると、子どもたちからは驚きの声や感動を伝える声が聞かれていました。

■ 幕末、村民の困窮を救った福田太郎八 太郎八神社に祭られている太田宿本陣で庄屋の福田太郎八は、1833年（天保四年）、現在の西町で生まれました。

当時、太田村一帯は土地が高く木曾川の水も利用できなかったため、わずか数日間の日照りで水田に亀裂が入り、穀物が実らず村民は苦しみました。そこで太郎八は各所のため池を造り、新田開発に取り組んだのです。また、同様に困窮していた武儀郡牧谷（現美濃市）から移住者を募りました。1878年（明治十一年）、病に倒れた太郎八が藤江村（現大垣市）の医者に診てもらった際には太田新田から屈強な若者たちが集まり、籠（かご）を担ぐなどして献身的にお供をしたと言われています。

■ 本校には、北舎と南舎に囲まれた閑静な中庭があります。今年度、太田っ子たちは例年以上に美しい環境づくりに努めました。中央に設けられた百年記念碑のさらに奥に、古き学校の象徴とも言える「二宮金次郎（尊徳）」の銅像があります。1月の始業式では、薪を背負いながら読書に似せしむ彼の勤勉な生きざまを子供たちに紹介したところです。明道義校（太田小）の開校は金次郎の死没十七年後にあたります。たとえ時代は移り変われども、志を高く掲げ世のために身を尽くした先達に対し、深い敬意と感謝の念を新たにしたい令和五年度でした。